

時代の狭間を生き抜いた高虎

早稲田大学教授 深谷克己

『高山公実録』はこれまでも知られていた記録であるが、その膨大な内容が歴史研究に十分に生かされてきているとは言いがたい。今回の翻刻本刊行はこの記録の多様な分野への活用を助けるにちがいない。

『高山公実録』は藤堂高虎の一代記である。これは「実録物」ではなく「実録」そのもの、つまり高虎の一代の事績を年月日順に編集した「編年体史書」である。驚くほど丹念な文献収集にもとづいて、それらを公平に引用し、そのうち「謹按」の項で、冷静な比較検討を進める分析の書である。その方法意識は現在の文献史学にも通じるものがあり、挙げられた諸書は二六〇以上の多数にのぼる。

この実録は第四十九巻（付録二巻目）末尾に跋文らしき注記と自作の歌一首があり、「寛文四辰年（二六六四）八月廿四日太神朝臣惟直」の記名があるところから、この人物によってこの編纂が終わったという説があるが、一八世紀中葉に完成した『宗国史』も各所に引用されており「謹按」にも乱れがないから、この実録の成立はそれより後のものであることはあきらかである。

近世初期政治史研究に貢献

東京大学史料編纂所助教授 山本博文

近年の元和・寛永期政治史の研究動向として、一次史料による史実の確定が飛躍的に進んだことが指摘できる。たとえば『徳川実紀』でなく酒井家本江戸幕府日記によって当時の記述をもとに史実を復元し、諸藩に残された原本史料によって政治過程の裏面を窺うといった手法である。歴史学においてもっとも重要視されるのが、記録・文書といった一次史料であるから、これは当然のことである。

筆者は、細川家史料の編纂を公務としており、その成果である細川忠興と忠利の往復書状（『大日本史料細川家史料』）を中心に『江戸城の宮廷政治』を執筆した。その時、一次史料の豊かな世界に目を奪われる一方で気づいたことがある。それは江戸時代における家史編纂のレベルの高さである。確かに細川忠興の書状などには貴重な情報が記されているが、実は『細川家記』『綿考輯録』や『部分御日記』といった編纂物にすでに載せられている史料が大半であった。自分の研究フィールドにおいては、原本を含むすべての史料に目を通すことは必要であろうが、全国すべての藩に対してそれを行なうことは不可能に近い。しかし、それぞれの藩の信頼できる編纂史料を手元においておけ

高虎が七五歳という長寿を全うし、その生涯が弘治二年（一五五六）寛永七年（一六三〇）という中世から近世への移行期をふくむために、高虎の一代記は自ずから戦国争乱から幕藩体制成立へかけての、天下統一・朝鮮侵略・朝暮和融・幕藩政治などの歴史変動をくつきりと象徴するものとなっている。高虎は、それらの変動の中心で活躍してきたから、この実録は、最高権力者たちと武将・大名の関係の細部をうかがうことのできる絶好の史料である。

この実録の興味深いところは、戦国武将の足跡だけでなく、近世的支配に自己を作りかえていこうとする大名の努力が読みとれることである。寛永二年（一六二五）、すでに七〇歳の老境に達した高虎は、この年触れ出した「条々」の中で「孔子之道」、つまり儒教政治の理解を求めている。四十九巻付録には「公の御遺訓」が大量に載せられている。これらには、軍団の長としての高虎と近世的な治者に変わろうとする高虎とが混在している。高虎は、戦国武将から近世明君への変身の努力を続けた大名としてもたいへん興味深い。

ば、自分の視野を居ながらにして全国に広げることができる。

今回翻刻出版された『高山公実録』は、津藩初代の藤堂高虎の事跡を編年体で編纂した一代記である。藤堂高虎は、元浅井長政の家臣で、羽柴秀長、同秀俊、豊臣秀吉、徳川家康と、次々に主家が没落する困難な時代を生き抜き、三十二万余石の国持大名になった武将である。特に、秀吉に仕えていた頃から家康に好を通じ、関ヶ原合戦では東軍に所属、その後も、家康から伏見城・丹波亀山城など諸城の普請を命じられるほどの信任を受け、秀忠の娘東福門院の入内工作を行うなど非常に複雑な政治的動きをしており、その真相の究明は近世初期政治史の課題の一つである。今回の刊行作業によって、その高虎の生涯を概観するための基本史料が座右に置くことになったことは喜ばしい。全体を通覧するに、引用史料には藤堂家文書、藤堂家の家譜や高虎の年譜、津藩の旧記、家臣の書上・覚書、地誌、戦記、雑史など基本史料が網羅され、しかも文書が元の形でふんだんに引用され、編纂者の考証も付されていて非常に信頼度が高い。これからの近世初期政治史研究の上で欠かすことのできない刊本史料となるであろう。